

Title	初期ブレヒトにおける母親像の周辺
Author	三上, 雅子
Citation	人文研究. 32 卷 3 号, p.163-173.
Issue Date	1980
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	森川晃卿教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

初期ブレヒトにおける母親像の周辺

三 上 雅 子

I

ベルトルト・ブレヒトは約40年にわたる創作活動の中で、女性を主人公とする戯曲を8篇産みだしている。その内の5篇までが母親¹としての女性を中心にすえたものであり、『母』、『カラールのおかみさんの銃』、『セチュアンの善人』、『肝っ玉おっかあとその子供たち』、『コーカサスの白墨の輪』と続く一連の系譜に目を注ぐ時、「ブレヒトの革命は女性のもの——より正確には母親のものである²」とするフリッツ・J. ラダッツの指摘はある程度首肯されえよう。

『メー・ティ』中では「芸術家は闘いうるか？」との命題のもと、迫害の時代に官憲の手中に落ちずに真実を主張するにはどのようなモチーフを選べばよいかと尋ねる彫刻家に対して、メー・ティは次のように答える。「身重の労働者の妻をつくれ、その女が心痛に満ちた眼差しで自分の体をじっと眺めている姿にせよ。そうすれば君は多くの事を言ったことになる。³」

前記の5作品において主人公達は種々の葛藤に巻きこまれるが、それらの葛藤のほとんどすべては彼女達が母親であるという事実を前提としている。ペラゲーア・ウラーソワの革命家としての出発点は、息子のためにおいしいスープをつくってやれない母親の嘆きであり、アンナ・フィアーリングが肝っ玉と呼ばれるに至るのは、3人の子供を育て商売を続けていくためにはそうした特性を持たざるをえなかったからに他ならない。またシェン・テの分裂をより強めるのは、妊娠によって自分以外のもう一つの生命を維持しなければならぬ必要に直面することであったし、置き去りにされた領主の子供を引き受けることによっていわば身ごもらずして母となったグルシェは、生存を脅かされ、婚約者がありながら子供に父を与えるために他の男と結婚しな

ければならない。これを要するに、劇中人物としての彼女達の行動を規定し筋を発展させていくのは、母親という属性なのである。母親は他者の生命を養い育てる者であり、それがためにブレヒト作品の男性像に往々見出されるが如きアウトサイダーになる事は許されず、社会の現実がいかに苛酷であろうともあくまでもその圏内に踏み留まって、我が子の生命維持のため苦闘していかなければならない。それゆえ彼女達は自身が望むと否とにかかわらず、必然的に社会矛盾と正面から対決する事を強いられる。「『労働者の寡婦であり、労働者の母である』ペラゲーア・ウラーソワは、それゆえ二重に搾取される者である：一度は労働者階級の一員として、いま一度は女及び母として。二重に搾取される母親 (Gebärin) は、被搾取者達をそのもっともはげしい屈辱において代表する。母親が革命化されるならば、もはや革命化されるべき者は、何も残っていない。」⁵ヴァルター・ベンヤミンが『母』について述べたこの言葉は、ブレヒト劇のすべての母に対して言われるべきものである。

ペラゲーア・ウラーソワ、カラールのおかみさん、肝っ玉おっかあ、シェン・テ、グルシェ、これら一連の女主人公達は最も虐げられた者の名において、社会現実の告発者かつその変革の担い手たる資格を手に入れるのだが、なお彼女達に共通するいま2つの特性について言及しておかねばならない。その第1は、彼女達が家族を社会から切り離し同時にその重圧から守る夫を持たぬ寡婦であること、第2はその子供が必ず息子であることである。ブレヒトは、シェン・テをして未だ生まれざる子供に対して、既定のもの如く「私のかわいい息子よ！」と呼びかけさせている。ここに至って子供は、完全に息子という語と置き換えられうるものとしてとらえられていることにわれわれは気付く。

極度の様式化、簡略化により思考の命題を最も直截な形で観客に例示する演劇的実験、教育劇を分水嶺として、後期の大作群へと至る1つの里程標となった『母』で始めてブレヒトは母親という形姿を主人公とした。それゆえに、従来しばしばブレヒト作品の母親像の原型は、母親の革命家への成長を描いて彼の作品中最も楽天的と評される『母』に求められてきた。しかしながら、ブレヒトのマルクス主義学習の成果であるこの作品をもってして、彼の母親像の出発点とするのはいささか性急との謗りを免れまい。ブレヒトは学習の結果獲得された社会構造への洞察眼をもってして、母親という形象を見出したわけではない。庇護者たる父親を欠いた母と息子の図式は、ブレヒ

トの世界観の変容とは係わりなく、その文学活動の初期から一貫して彼の作品内構造を支えてきた、いわば彼の創作衝動の根幹をなすテーマなのである。

だが、われわれは少々結論を急ぎすぎたかも知れない。上記の見解を例証するために、われわれはここで『母』成立時より約20年ほど時を溯らねばならない。時は1914年、あたかも第1次世界大戦勃発の前後であり、所は当時軍需産業の中心地として栄えたアウクスブルク。ブレヒトは16歳のギムナジウムの生徒であった。

II

1914年8月17日、*Augsburger Neueste Nachrichten* の付録 Erzähler は、ベルトルト・オイゲン (Berthold Eugen) と署名された時事評論 „Notizen über unsere Zeit“ を掲載した。

「今日この頃、皆の眼はわれわれの皇帝に注がれている。この男がどれほどの精神力を現示しているのかを、人々はほとんど驚嘆しつつ見ている。彼がこの戦争を望みはしなかったことは、誰でもが知っている。…——今や突如としてすべての者が、彼の偉大さについて意見を一にしている。社会民主主義者達も彼に忠誠を誓った。誰もが、この戦争は避けられないことを知っている。(中略) 国民全体が忠実に一致団結している。党派は消滅した。敵の間には、不一致が無防備が存在している。それに対して、われわれは武装している。道徳的に武装している。ドイツの詩人と思想家が2世紀来つくり上げてきた堅固なドイツ的特性は、今や実際に価値あることが示されている。冷静かつ沈着に、鉄の規律にのっとり、しかしながら熱狂に燃えつつ、勝利に歓喜するよりもむしろ齒をしっかりと喰いしばってわれわれの男達は出征していった。

そして後に残った他の者達、彼らは自分達とその兄や息子にふさわしい者であることを示すだろう。女達はか弱き性という言葉が嘘であることを暴くであろうし、若者たちは、『今どきの若者』に対して向けられているうろんくささの念を退けるだろう。われわれみんな、すべてのドイツ人は、神を畏れそれ以外にはこの世では何者をも畏れていない。」

ベルトルト・オイゲンは引き続き1年半にわたって、*Augsburger Neu-*

este Nachrichten, München Augsburger Abendzeitung の2つの新聞に約20篇の愛国的戦争詩、並びに時事評論及び若干の短編小説を精力的に発表している。しかし大戦開始から1年を経た1915年の夏頃より作品数は減り、1916年2月に発表された『兵士の墓』と題する詩を最後としてベルトルト・オイゲーンの名は紙上から消えた。それから半年間の沈黙の後、少年は今度は戦争をではなく自然とアウトサイダーを主題とする一連の詩を書きだしていく。彼は今はベルトルト・ブレヒトと名乗った。

オイゲーン・ベルトルト・フリードリヒ・ブレヒト (Eugen Berthold Friedrich Brecht) は、その本名からこの2つのペンネームをつくりあげた。その内のベルトルト・ブレヒトが20世紀文学史上に輝かしい光芒を放っているのに対して、ベルトルト・オイゲーンとしての文学活動は近年に至るまでまったく等閑に付されてきた。それは必ずしも技法の拙劣さのゆえではない。その内容が、終始一貫した反戦主義者、少年期からすでに自分を取り巻く市民社会と真っ向うから対立していた挑発的アウトサイダー云々といったブレヒト像、或いはブレヒト伝説をまったく裏切るものだからである。

「誰もが英雄的な死を夢想していた⁷」とブレヒトの同級生が語ったように、当時アウクスブルクの町を支配していた愛国熱はブレヒトを例外とはしなかった。彼は自発的な勤労奉仕の一環として、塔上での対空監視を何度か勤め他の若者達にも参加を呼びかけている。先に引用した時事評論で読みとれる彼の主張、より具体的には、この戦争はドイツが望んだものではなく敵国側から押しつけられたものなのであり、ドイツ帝国は自身の自由と名誉を擁護するためにやむなく立ち上ったのだとする戦争観、ドイツ国民の忠誠、一致団結を謳い上げる国家観、これらは支配者層からのプロパガンダの受け売りに過ぎず、当時のブレヒトの政治的思考の未熟さを露呈している。更には、皇帝の偶像視及びその延長線上に位置する神—皇帝—祖国の三位一体の世界観は、当時のブルジョア社会を支配していた家父長制に基づくヴィルヘルム二世朝式イデオロギーを、若きブレヒトもまた共有していたことを雄弁に物語っていると云えるであろう。つまり、ベルトルト・オイゲーン時代の彼の文学活動の内実は、ブレヒト研究者達を充分鼻白ませるに足る体のものであり、無視されるか或いは言及されるとしても、前文学的時期の産物としてせいぜい物珍しさ半分に取り扱われるのみで、数カ月の沈黙の後のベルトルト・ブレヒトへの変身をもって文学開眼と見なすのが常であったのだ。

しかしながら、ブレヒトの文学世界はベルトルト・オイゲーンとしての活

動を切り捨てたところに存在しているわけでは決してない。このギムナジウムの生徒の手になる作品群もまた、まぎれもなくブレヒト的世界の一部、否それどころか原風景をなしているのである。我々にそう判断させるもの、それは彼の戦争詩に現われる母と息子の形象だ。

ベルトルト・オイゲンがその幼い愛国的熱情を最も率直に披瀝しているのは、大戦開始直後に連続して書かれた『アウクスブルク戦争通信』においてだと言えよう。だがその熱狂の最中にもすでに彼は、「このようにして待つこと、待ちこがれることは、外の世界の『陽気な』戦争における戦闘よりも恐ろしいと思われる⁹」と、陽気な戦争という当時の青年達をいとも軽々と出征へと狩りたてていった戦争観に対して、一抹の皮肉をこめて引用符を冠することによって抵抗を示している。彼の戦争詩、時事評論において、勝利の凱歌が有頂天に歌われることが極めてまれであることは、注目に値する。彼の作品に登場するアウクスブルクは、軍需景気に沸く町ではなく、不安を底に秘めた静けさの中で戦場からのニュースを待ちわびている灰色の町だ¹⁰。そしてこの灰色の世界で重みをかちとっているのが、戦争での少年兵士の孤独な死と息子のために嘆く銃後の母というテーマなのである。

1914年12月に発表された『現代の聖徒物語』では、戦場からのニュースによって地球の片側では敗北の屈辱から来る叫びが、もう一方の側では勝利の歓声が上げられる情景、死者の知らせによって叫びが静まる様が描かれ、最後に次の詩句が置かれる。

ただ母親達だけが泣いていた
こちら側で——そしてあちら側¹¹

また『行方不明者の母達』で描かれている母は、「死が息子から体や名前そして悲しみを奪いとってしまっ¹²て以来」、自分自身の生活を送ることも、計画することも、考えることもやめて、「彼は決して死んではない」と信じながら虚しく息子を待ち続ける。

母親であることは、われわれの時代¹³にあっては苦しむことだ

とうたわれているこれらの母達は、勝敗に係わりのない戦争の本質、つまり死をもたらすものとしての戦争を告発する存在という意味において、後年の

ブレヒト劇の母達を先取りしている。もっともこうした発想はいまだこの段階では、「母親達が嘆かずに息子の死ぬのを見ていること」¹⁴を美しいと見なす、祖国のための犠牲を賞讃する発言と混在しており、全体を支配するトーンとなるには至っていないのだが。

一方、戦場に送り出された彼女らの息子達はどのような運命を辿るのか？ ハンス・ロデイは「ある灰色の日に見捨てられて／孤独に死んだ。」¹⁵彼の苦難には「歌や栄誉はなかった。」¹⁷『少年旗手』に現われる少年は、「狂ったびっくりした眼をして／悲鳴をあげて」¹⁸死んでいくのである。彼らの死には、英雄死につきものの華やかさはまったく与えられていない。キーワードの如く繰り返される言葉は *einsam* であり、*verlassen* である。

彼らは苛酷な戦場において死の直前に、唯一残された避難所、平安を約束してくれる者、母に向かって呼びかける。少年旗手は、突撃の当日震える文字で手紙をしたためる。

お母さん…お母さん、僕はもうこれ以上我慢できません¹⁹

『母の名前』は次のような文句で結ばれている。

死んでいく者達は母に向かって呼びかける
たとえ母がすでに10年前に死んでいようとも²⁰

ベルトルト・オイゲンは銃後の母達に、社会的な面から光をあてることも忘れてはいない。9月18日付けの『アウクスブルク戦争通信』では、まず市立劇場での赤十字のための華やかな式典が描写された後、場面は一転して明暗対照的な光景が読者の眼前に展開されている。雨が絶えず灰色に単調に降っている中、「蒼白い、心労にやつれた顔に気苦勞が刻みこまれている、²¹貧しい身なりの女性労働者達」が、食物をもらうために福祉事務所の前に集まっている。押しつけられたような沈黙、痛ましい悲嘆の雰囲気²²が光景全体を支配している。彼女達は食物をもらうことを恥じるが、男達が出征し収入が絶たれた以上他にどうする術もないのである。「今や家族は一人ぼっちで庇護もなくそこに立っている。」

『ドイツの春の祈り』での農夫は、農作を願って神に祈る。

主よ！

お聴き下さい、母親達がたそがれつつある土地で苦難に満ちて叫んでいる様を

主よ！彼女達は飢えている子供たちのためにパンを求めてずっと叫んでいるのです²³

オイゲンの作品中種々の個所に登場する女性達は、ほとんど常に「貧しいみなりをした労働者の妻」と表現されているのだが、これによっても兵士の母として彼が、どのような階層の女性を想定していたかは明白であろう。

以上概観した通り、戦争肯定の色彩は帯びながらも、すでにここには後のブレヒトの作品世界をある意味で決定づける図式、父なき母と息子という形象が明瞭に姿を現わしているのであり、それはベルトルト・オイゲンとベルトルト・ブレヒトとの断絶を埋めて余りあるものなのだ。

III

ベルトルト・オイゲンの戦争文学には特異な点が1つある。戦争の悲惨を述べる場合、最も普遍的に用いられるであろうと思われるモチーフに彼が手を染めていないことである。息子を失なった母の嘆きは何度も取り上げる一方で、恋人との別れを悲しむ娘については彼は一言も割きはしないし、夫に先立たれた妻の悲嘆にも触れることはない。戦争の犠牲者、かつ告発者たる栄誉はただ母親のみが担うのである。²⁴

この疑問に対して、当時の彼にあっては息子たる兵士に自分を置き換えるのが最も容易であったのだと答えるのはたやすい。しかし残念ながら、この答えは完全ではない。後年に至ってもなお、彼が母親という形象に執着したことは本稿の冒頭に指摘した通りだからである。

おそらくこの疑問を解く鍵の1つは、伝記的事実に求められよう。ブレヒトの母は、彼が22歳の時早くも亡くなってしまうのだが、終始病気がちの婦人であった。彼女は実際的な弟のヴァルターよりも、自分と同様病気がちで、同じく文学好き、夢想的なアイギーン（ブレヒトの愛称）の方をより深く愛していた。その結果、彼女はある時期までアイギーンの通学に付き添っていた程で、このことは彼の級友達のからかいの好対象であった。²⁵ブレヒトの父は製紙会社の支配人としての仕事が忙しく、子供の教育は母に一任されて

いた。社会的に見れば、ブレヒトの家庭は新しい中産階級とでも呼ばれるべき層に属していた。新しい中産階級にあっては、父親は会社に雇われており、昔からの中産階級とは違って1日の大半を家庭の外で過ごす。そのためかつての家父長が家庭内で持っていた権威を、彼らは喪失しているのである。新しい中産階級の家庭で、父に代って大きな影響力を保持しているのは母親であり、子供と母との心情的結びつきは甚だ強い²⁶。ブレヒトの家庭は、父の昇進に従って生活程度が向上してきた典型的新興中産階級であった。こうした環境のもと病弱の母との密接な関係の中で人となったブレヒトにとって、人間の苦しみの原型を母親に求めるのは極めて自然な成り行きであったかも知れない。丁度、家父長制の社会背景のもとで成立した市民悲劇において、市民階級のバックボーンを形成する価値観、世界観は父親によって代表され、それが娘に伝えられていくように、ブレヒトにあっては母から息子へと肯定的価値観は受け継がれていくのである。

この間の事情について示唆に富んでいるのは、1914年2月にギムナジウムの同人誌 „*Die Ernte*“ に発表された『母親と死』と題する短編である。作中の主人公はすでに長い間病いに苦しんでおり夫婦生活にも何の喜びも感じていなかったのだが、思いがけなくも子供を身ごもる。夫は娘を望むが、彼女は息子であることを熱望している。そしてある夜、夫が医者を呼びに行き留守の間に、彼女は自分の命と引き換えに望み通り男の子を産み落とすのである²⁷。ブレヒトの最初期の作品の1つであるこの小説の母親像には、彼自身の母親が最もストレートな形で投影されていると言っても誤りではないであろう。そして、一人で苦しみつつ男の子を産むこの母こそ、後年の彼のすべての母親像の原型となるのである。

IV

神—皇帝—祖国という、人を殺しかつ自分も殺される戦争を支える男性的イデオロギーに対して、孤独に死んでいく兵士と、その死を嘆く母親から成るアンチテーゼを設定してきたベルトルト・オイゲンが、いつまでも型通りの愛国少年に留まってははられなかつたことは、充分予見されよう。最初の熱病的興奮がさめれば、次々と護送されてくる負傷者の群れと膨大な戦死者リストが、戦争の現実の姿を否応なく少年にもつきつける。1916年にはブレヒトの級友26名のうちすでに11名が兵役に服し、戦死者もあらわれている。

戦争初期の段階で愛国的行動として捕えられていた対空監視など、児童に等しいことが悟られてくる。

1916年「祖国のために死すは甘美にして榮譽なり」というホラチウスの言葉を課題とする作文によって、彼は教師や級友間に大きな反響を巻き起こした。

「祖国のために死すは甘美にして榮譽なりという言葉は、ただためにするプロパガンダとしてのみ評価されうる。生に別れを告げることは、ベッドの上であれ戦場においてであれつねにつらいものであり、生の盛りにいる若者にとっては疑いもなく最もつらいものである。ただ頭のからっぽな者だけが、虚勢を張って暗い門を通り抜けて軽く一跳びなどと口にすることができるのだ。そしてそれも、ただその者達が最後の時から遠く離れていると信じているときに限ってである。(後略)」²⁸

この挑発的な作文のために、彼は危うく放校の憂き目を見るところであった。

犠牲死の讃美からの180度の姿勢転換は何を契機としているのか、具体的な事実をわれわれが挙げることはできない。ともかくも自己批判をさえ匂わせるこうした言辞を残して、彼はベルトルト・オイゲンとしての自己と訣別する。世界大戦は相変らず続いてはいるが、彼の文学では戦争は以後まったく黙殺される。今や彼は、自然を性を、娼婦、海賊、無頼漢を、つまり社会と歴史の外に立っているもののみをうたい上げるのである。

ホラチウス批判の作文を吟味するなら、そこに述べられているのは「死」に対する反発、生の肯定のみであって、「『祖国のために』に含まれる政治的命題はまだ問題にされていないこと」²⁹が気づかれるに相違ない。皇帝と戦争に背を向けたブレヒトの態度を決定づけているのは、政治的な反戦意識ではなくして厭戦思想とも呼ばれるべきものだった。ベルトルト・オイゲン時代の最後に近い頃書かれ断片のまま終わった『チンタオの兵士』においては、「神からも悪魔からも見捨てられる」という恐怖³⁰、「人間も神も救ってはくれない」という絶望が前面に押し出されている。戦争の初期から描かれ続けてきた、戦場における兵士の孤独な死というモチーフはここではより拡大され、この世界での人間の *Verlassenheit* そのものが問題とされてくるのである。

神—皇帝—祖国の一体化に支えられたヴィルヘルム2世朝式、家父長制的

価値観に寄せられた幻想が破れた時、その後に来たものは新たな価値観ではなく、すべての価値の否定に他ならない。歴史的に規定された社会システム、つまり近代ブルジョア社会に留まらず、社会という存在そのもの、何らかの形で一定のイデオロギーに立脚し、それへの献身を要求するこの超自我機構全体が拒否されるに至るのである。逆説的に思えるかも知れないが、戦争のもたらす悲惨、困窮に社会批判的な目を向けたのは、皇帝を賛美したベルトルト・オイゲーンの方である。ベルトルト・ブレヒトは、一切の社会的現象を自己の文学から排除する。ベルトルト・オイゲーンとしての最後の作『兵士の墓』は、当時の彼の精神状況を如実に反映している。

夕べには風が墓の上を吹きすぎて

調べをかなでる

その調べを聞くと悲しくなる。何が悲しいのかは僕にはわからない、
それもどちらでもよいことだ³¹

いかなる価値観にも支配されず、それゆえあらゆる意味付けを奪われた世界に人間が置き去りにされている。それが後に『家庭用説教詩集』としてまとめられた幾多の詩における、基本的世界構造である。

こうした世界にあっては、これに先立つベルトルト・オイゲーン時代や、中期以降に見られるような、社会矛盾の犠牲者、告発者としての母は必要とはされない。代って登場するのは、母親からすべての社会的属性を剥ぎとった後になお残るもの、Mutterschoßである。しかしながらそれについて語ることは、もはや本稿の課題ではない。

注

底本としては右記を用い、以下 G. W. 巻数一頁数と略記する。Bertolt Brecht: *Gesammelte Werke in 20 Bänden*. Frankfurt a. M. 1973.

1 残る3篇は、『屠殺場の聖ヨハンナ』、『シモーヌ・マシャルの幻覚』、『ルーアンのジャンヌ・ダルク裁判』、いずれもジャンヌ・ダルクモチーフに基づく作品である。

2 Fritz J. Raddatz: *Ent-Weiblichte Eschatologie*. In: *Text+Kritik, Bertolt Brecht II*. Hrsg. von Heinz Ludwig Arnold. München 1973, S. 152.

3 S. 152. G. W. XII—553

4 ブレヒト作品の男性主人公は、これとは対照的に大抵独身者であり、父親であるプ

ンティラやガリレイにおいても、彼らの行動は父親であることとはまったく無関係である。

- 5 Walter Benjamin: *Versuche über Brecht*. Frankfurt a. M. 1971, S. 39.
- 6 G. W. XX-Anmerkungen-I f.
- 7 Werner Frisch / K. W. Obermeier: *Brecht in Augsburg*. Frankfurt a. M. 1976, S. 88.
- 8 Ebd., S. 225f.
- 9 Ebd., S. 233.
- 10 彼の戦争詩、時事評論で多用されているのは grau, still という形容詞である。still は町の様子を描写する際に使われているが、この語は単に静かというだけでなく、言葉には出されない緊張、不安を内に秘めているというニュアンスをも伴う。
- 11 G. W. VIII — 4
- 12 G. W. VIII — 15
- 13 Frisch / Obermeier: a. a. O., S. 248.
- 14 Ebd., S. 236.
- 15 イギリス海軍のドイツスパイ。1914年11月6日に射殺された。
- 16 G. W. IV — 4
- 17 G. W. IV — 5
- 18 G. W. IV — 7
- 19 G. W. IV — 6
- 20 Frisch / Obermeier: a.a.O., S. 264.
- 21 Ebd., S. 250.
- 22 Ebd., S. 251.
- 23 G. W. IV — 5
- 24 後年の作品においても、恋愛関係はさほどの関心は払われておらず、言及される場合には主にその肉体的な面が重視され、作品のテーマを担うほどの重みは持たないのが通例である。
- 25 Klaus Völker: *Bertolt Brecht. Eine Biographie*. München 1976, S. 12.
- 26 Carl Pietzcker: *Die Lyrik des jungen Brecht*. Frankfurt a. M. 1974, S. 133—135.
- 27 G. W. IX — 8—10
- 28 Frisch / Obermeier: a.a.O., S. 86.
- 29 Klaus Schuhmann: *Der Lyriker Bertolt Brecht 1913-1933*. München 1974, S. 23.
- 30 G. W. IV — 11
- 31 Frisch / Obermeier: a.a.O., S. 277.